



タンポポの里の立て札  
裏面に解説がある

広々として、農地としての立地条件に恵まれているように見える藤ノ川の開拓は、意外なことにそれほど早くはないという。この広大な平地を農耕地にするには、水路整備などかなり大掛かりな工事が必要であったため、江戸中期までは手つかずであったらしい。

まず、江戸初期に加賀藩主前田氏の家臣前田庄三郎という人が、現在の黒潮町佐賀・中津野に農地を拓き、居を構えた。それから何代か後の江戸中期、前田家一族やその縁者たちが、さらに新しい農耕地を求め、津野山郷津野氏の家臣団とともに、荒地地だった藤ノ川の地を拓いたと文献にある。したがって、現在も藤ノ川には前田姓が多い。

さて、地名の由来であるが、当時この地には藤の木が生い茂っていたことから、藤ノ川と名付けられた。また、その藤のかずらを編んで、「ふじ」や「もっこう」といった袋を作り、開墾作業にあたっては、それで土を運んだのだという。

貴重な事例で特筆すべきこととして、ここ藤ノ川には、西日本では珍しい部類に入る「セイタカタンポポ」の自生地がある。西日本に多く分る布が見られる種は、カンサイタンポポ、イトウカポポのどちらかに偏った種であるが、ここに自生するセイタカタンポポは、両種のちょうど中間の性質と形態を持った種で、これが自然分布なのかどうかは判別がつきにくいということである。研究をしておられる方によると「定かではないが、この地を拓いた前田氏一族が、食用として大切に守ってきた名残ではないか」ということである。地区の集会所のそばに「タンポポの里」という札があり、詳しく解説されている。

現在の藤ノ川地区は56世帯、約140人が暮らしている。町内を探しても、これほど広大な平地が続く地区は数少ない。日当り抜群なこの平坦で広大な地区では、兼業、専業いずれにしても農業に熱心な人が多く、酪農が行われていたり、さらに集落営農組織もあり、先祖が苦労して作り上げてきた農地を懸命に守っている。

藤ノ川という南国土佐のいわば辺境の地のこの空間に、加賀百万石のスピリットが生きている。



地区の集会所と山から移されたお宮

| 町のうごき | (6月30日) |        | 前月比 | 出生 死亡 転入 転出 |    |    |     | 適正值(mg/l) 7月10日 |        |         |          |
|-------|---------|--------|-----|-------------|----|----|-----|-----------------|--------|---------|----------|
|       | 男       | 女      |     | 男           | 女  | 計  | リン酸 | 硝酸              | アンモニウム | アニオン活性剤 | 化学的酸素消費量 |
|       | 8,924   | 10,003 | -9  | 4           | 18 | 19 | 14  | ≤ 5.0           | 測定値以下  | ≤ 5.0   | 0.172    |
|       |         |        | -19 | 4           | 14 | 13 | 22  | ≤ 0.5           | 測定値以下  | ≤ 1.0   | 0.30     |
|       | 18,927  |        | -28 | 8           | 32 | 32 | 36  | ≤ 10.0          | 10.36  |         |          |
|       | 世帯数     | 8,768  | -11 | (6月中の届出)    |    |    |     |                 |        |         |          |

● 四万十町ホームページアドレス <http://www.town.shimanto.lg.jp/> ●

※広報「四万十町通信」はホームページでも、ご覧いただけます。(pdfファイル)

調査：大正(吾川)  
資料：四万十高校自然環境部